

ジェチルスチルベストール、『イヤー・オブ・ミート』、
エコクリティシズム、そして国家(あるいは成長の限界)

サイモン・C・エストック ^{スニョクケン}(成均館大学校) / 波戸岡景太 訳

非ステロイド性発情ホルモン(ジェチルスチルベストール)による世代間の影響、成人女性の体をもつアメリカの五歳児、痩せすぎで骨が痛み、月経もとまってしまった日本人女性—どれをとっても、新人のデビュー作におあつらえ向きとは言いがたい題材ばかりだ。これがさらに、日米における女性の社会的役割を真剣に論じたり、人種やステロタイプを徹底に検証したり、はたまたセカンド・ミレニアムを迎える世紀末にあつて「真の文化」は原理的に不可能であることを真摯に追及するにいたっては、小説の成功はますます遠のいてしまうだろう。もちろん、ルース・オゼキの『イヤー・オブ・ミート』には喜劇的要素も豊富で、「ポリセクシュアルでポリレイシャル、そして倒錯的」と評されるその日系アメリカ人の語りは、ジョーイチ・ウエノ(あるいはジョーノ・ウエイノ)が遠い海の向こうの日本で企てたことに端を発し、真のアメリカの姿を描くに至る。その喜劇性は、たんなるおかしきをはるかに凌ぐものだ。それはあらゆる意味での「限界」に疑問を投げかけるもので、たとえばそれはレズビアンや異人種間での混淆に対する我慢の限界であったり、あるいは(風刺的な商品のなかでも特に)牛肉の売り上げを促進するテレビ番組「マイ・アメリカン・ライフ」に携わるベジタリアンカップルにむけられた我慢の限界であったりする。これは同時に、虚と実の境界線にたいする限界、すなわち食肉業界の背後にある虚実の境界や、巻末に参照リストを掲載するといったドキュメンタリー風の本作品自体がかかえる虚実の境界に向けられた限界でもあり、ドネラ・メドーズの言うところの、「成長」についての限界でもあったりする。そう、この複雑な小説はまさに、今回の(ASLE 日韓合同シンポジウム)の核心に触れる作品なのである。

非常に複雑かつきわめて抜本的な手法で書かれたオゼキのデビュー作は、ジェチルスチルベストール(DES)についての批判的な考察はもちろんのこと、斬新な視点から、とくに成長という概念に対して果敢に挑みかかる。現代アメリカを舞台とする本作は、語り手が純アメリカ産牛肉の消費者をさがして国を横断するというのがそのプロットだ。語り手ジェーン・タカギ=リトルは、日本での巨大な牛肉市場を獲得使用する多国籍企業ビーフ Ex に勤めている。アメリカ大陸を横断しながら魅力的なイメージをもとめてフィールド調査を重ねる彼女は、その過程で、真にアメリカ的であることは、浮遊するアイデンティティの海に洗われること、すなわち誰も彼もがユニークで、典型的な非アメリカ的なものたちのほざまに洗われることなのだ気がつく。もちろん、アメリカ人であることは本来的にそういうことを指すのであり、ビーフ Ex が求める伝統的なステロタイプなどまったくの絵空事にすぎない。こうした箇所はとくに論じる必要もないだろう。というのも、ステロタイプ批判などとうに時代遅れなものだし、本書の重要性はその先にあるのだ。

牛や家禽を(限界まで)成長させてしまう(DES といった)合成ホルモンの使用をめぐるジェーンの発見によって、語り手はきわめて刺激的なトピックを獲得し、そして変化をはじめ。鶏や牛の成長を促進するため、いかに DES が使用されてきたかを学んだジェーンは、事態が想像以上のものであり、それは個人の手遥かにあまるものだを知る。彼女は自分の母親も妊娠中に DES を摂取していたことを発見し、そして、必然的に彼女自身が「DES の娘」であったことに気がつくのだった。

一方、海のむこうでは、(ジョーイチの妻)アキコ・ウエノが自分探しの旅にのりだしていた。徹底的にステロタイプな人物のアキコは、彼女を心身ともに虐待する夫に強要されるがまま「マイ・アメリカン・ワイフ」を観るのだが、やがて彼女自らその番組を観たがるようになり、可能性にみちたその世界での疑似体験を待ち焦がれるようになってしまうとき、彼女の中で何かが変わる。結果的に彼女は自身のセクシュアリティに向き合うこととなり、アメリカと闘うこととなるのだ。

はじまりは、ベジタリアンのレズビアンたち(もちろん、彼女たちはもうひとつのステロタイプであり、彼らの服はたぶんパープルで、履き心地のよいビルケンサンダルを履いている)。ジェーンに宛てて、アキコは次のように書いている。

親愛なる タカギ=リトル様、

貴女は、私のことなどご存じないかもしれません。といいますのも、私は上野という男の妻にすぎないからです。上野は、ビーフ Ex に勤めております。このような手紙を差し上げる非礼を恥じておりますが、ふたりの子供と暮らすレズビアンカップルという貴女のテレビ番組にたいへんな感銘をうけてしまい、どうしても筆をとらずにはいられなかったのです。なにをおいても、私の人生を変えてくださったことに感謝申し上げます。テレビ番組を観た私は、貴女を信じて、強くなろうと思いました。そして何より、男などいらぬというあの黒人女性の言葉を耳にした私は、一も二もなく同意して、思わず声をあげてしまったくらいです！（レズビアンとは何を知らない私は、自分がそうであるかも分かりません。でも、これまで結婚を望んだことなどなかったし、私は誓って「ジョン」の妻などではありません）

(213-214)

こうした彼女の思いは深刻であり、そこにあるのは小説をこえた教訓だ。

小説の外に、あるいはそこで展開するナラティブの外に、DES はきわめてリアルな問題として存在している。本物の牛のみならず、本物の人間にも服用される DES。だから「DES の娘たち」はまったくの真実だし、彼女たちの母親は、DES をみずから服用したり、不注意で牛から DES を摂取したりしてきた。虚構の語りの外側に存在する DES は次のように説明される。「1938 年から 71 年にかけて、何万という女性に 投与された強力な合成エストロゲン。当時は流産予防として知られていたが、現在は、それを服用した女性に不妊症あるいはなんらかの健康障害が現れるとされている」。DES はまた、牛乳や卵の生産性を高めるとか、牛を肥えさせるとか、それが化学的に安全な方法で行われるものとして、農業組合にも販売されてきた。多くの資料が物語るように、そうした農業組合に流された情報は嘘である。「この新しいテクノロジー[DES のこと]が使用された牛肉の安全性に関して、虚偽の報道をした科学雑誌」を論難する資料もある。もちろん、巨額の資金援助が行われている科学研究のフィールドで、真なるものを見極めることは至難のわざだが、DES をめぐる論争があることと、DES がもはやかつてのように使用されることはないということを私たちは知っている。そしてそれが現実である。

ある批評家が指摘するように、「小説のなかだけの作り物ならばよいのにと読者が願う牛肉の添加物のすべて」は現実に存在する。

そして、この小説を拒絶する声があることもまた現実であって、本作品に寄せられた書評のなかには、「ベジタリアン作家による、思い入れたっぷりでベタベタのナンセンス小説」といったものから、「ぶっこんでる」とか「やりすぎ」、あるいは「説教くさい」「政治的すぎ」そして「偏見に満ちている」などといったものまで幅広い。中西部のとある書評は、オゼキが「アクティビストの計略」を持っているといったタイトルを（あたかもそれが犯罪であるかのように）掲げ、（以下に長々と引用するように）文を続けた。

彼女の警告はすべて聞き届けられた 曰く、赤肉は動脈の働きを妨げ、心臓病や前立腺癌を引き起こす。曰く、55 平方フィートの熱帯雨林は、1/4 ポンドの牛肉を生産するために破壊される。曰く、飼料となる動物は、恐ろしく過密で不潔な環境で飼育されている。曰く、屠殺される時、動物たちは苦しんでいる。曰く、牛肉の購買は地球温暖化の一因である。曰く、あなたが口にする動物は、大量のホルモンと化学物質と抗生剤を投与されており、なかでも抗生剤は私たちを抗生剤以前の時代へと引き戻しかねず、そのとき細菌感染は拡大し取り返しのつかない事態を引き起こすだろう。ヤダ、ヤダ、ヤダ。

「ヤダ、ヤダ、ヤダ」？ そんなパロディは書き手が思うほど効果的ではないし、むしろ自虐的でしらけた道徳観の表明にしか映らない。もちろん、運動家的な気概を持たない本ほど、規範的(それはしばしばヘテロな規範)なものであるし、そこで何かが告発されることなど起こりえないのだ。

牛や家禽が成育する限界点を DES で乗り越えようとする試みを批判しつつ、オゼキはまた、(ウォルマート化、マクドナルド化、などなど)拡大し続ける地球規模でのアメリカナイゼーションに立ち向かおうとしている。それは、とどまることを知らないアメリカの膨張主義とその成長を良しとするイデオロギーへの批判であり、そのアメリカを受け入れる日本への批判である。まさに本書は、エコクリティシズムが自らの信条とする誇りと喜びにかかわってくる作品なのだ。

とりわけ、この小説が提示する日本とアメリカの接点は、語るに難しく、口にするのはばかられるようなものだ。中心となる牛肉問題と環境問題に加えて、混淆と模倣、そして従属関係にある文化交流に対し、本書は疑問を呈していく。日本における急速な近代化とその努力とは、アメリカ人になりアメリカ人のように食べることだったのではないかと本書は示唆する。ジェーンは自覚的に「アメリカの茫漠とした幻想を、一か所にかたまった集団に売りさばく、文化のポン引き」を演じているのだ。(9)

本作品はまた、家庭内暴力の問題を、さまざまな動物虐待の問題に結びつけてもいる。ジョーイチ・ウエノの妻に対する虐待と暴力(battery)は、牛肉や集中飼育された動物(battery animals)に対する彼の尋常でない嗜好に結びつく。そこでは女性と動物が、牛肉や消費される商品のように扱われる。原型的な「アメリカの妻」は「豊かでコクがあり、けれども消化できぬほど硬くはないこと」(8)といった「食肉綱領」に表され、いっぽうで原型的な「日本の妻」は、ひたすら肉感的であってはならないとされる。

この小説でアイデンティティをめぐる政治学が環境主義と接続するのは、自らが「DES の娘」であることをジェーンが知り、それまでの自己理解や、両人種にまたがる自分の立場(日本とアメリカの文化横断的なポジションは言うまでもない)についての考え方に混乱が生じたときである。家族や愛について問い、伝統的な異性愛の規範的な核家族とはあるいはそれが全てではなく、(本物の)愛とは別の方法で別の空間に存在するのではないかと主張する本書は、合衆国憲法を改正し、同姓婚を法的に禁止しようとするブッシュ大統領におあつらえのトピックを提示する。提起された問題をつなぎ合わせていきながらも、本書はたんなる説教や、説教のための説教に終始することがない。それこそが、私が本作を選んだ最大の理由である。

エコクリティシズムとは何かますます分からなくなる作品だからこそ、この小説はエコクリティシズムにとって絶好の機会となり、かつまた偉大なる挑戦の書ともなる。もちろん、エコクリティシズムが語るべきこととはたんにソローとその湖というわけではないし、(それらが十分に大事なトピックであるにせよ)たんに汚染を語ればよいというわけでもない。エコクリティシズムは繋がりを語るものであり、本書をエコクリティカルに読もうとするとき、理論的批評の可能性は果てしなく広がっていくだろう。本書が提示してくれるのは、ラディカルな批評家たちが互いに共通する関心事を交えあうといった重要な機会に他ならない。最後に、本書の長所とは、批評家の糾弾にそぐうようなことがそこにはまったく書かれていないことであろう。本書は説教をしないのだ。(そして、私もそうありたいと願っている。)